

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2016 納富信留

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



2016 年度学術俯瞰講義 第 5 回 5 月 11 日

ソクラテスという「哲学者」の誕生

第 2 回：ソクラテスの生は何を生んだのか？

納富信留（文学部・哲学）

1、哲学という使命

（1）神との関係（古くからの告発への弁明）

* ソクラテス裁判（前 399 年）の罪状としての「不敬神」

告訴状「ソクラテスは、ポリスの信ずる神々を信ぜず、別の新奇な神霊（ダイモーン）のようなものを導入することのゆえに、不正を犯している。また、若者を墮落させることのゆえに、不正を犯している。」

* 神を信じない、敬わないという罪 ← 「天上地下のこと」を探求、ダイモーンの声

「知者」という名称：神を蔑^{なみ}する者という非難

* デルフォイのアポロン神託「ソクラテスより知ある者はいない」

神の言葉を「謎」と考え、神託を論駁しようと吟味していく（21B-C） → 結果、神の真意の発見（23A-B）

（2）神の使命（哲学者の生の弁明）

* 死を考慮すべきか？ 英雄アキレウス、戦場の比喻（28C-E）：指揮官に配置された場所で死の危険を冒して命令に従うべき

「それなのに、かの神〔アポロン神〕が命じられているというのに——そう私は考え、受けとっているのですが——つまり、知を愛し求め（φιλοσοφοῦντα）、私自身と他の人々とを吟味して生きねばならぬと命じられているのに、もしもここで死や他の困難を恐れて戦列を離脱するとしたら、それこそひどいことであり、その時こそ私を法廷に引き出すことが、真実に正しいことになるのです。死を恐れることで、実際には知者でもないのに自ら知者だと思い、神託に従わず、そうして神々を信じないという理由で。」（28E-29A、納富訳、光文社古典新訳文庫、58-59頁）

* 死を恐れることは「無知＝知らないのに知っていると思っていること」

（3）「哲学 φιλοσοφία」としての「魂の配慮」勧告

* 「哲学する φιλοσοφεῖν」という動詞は『弁明』では 4 箇所：23D, 28E, 29C, 29D

* 哲学をやめるという条件で釈放されると言われても、それを受け入れない！

= 神の使命に従って哲学をして生きる、または、哲学を貫いて死刑を受ける

* 魂の配慮の勧告（仮想の相手への語りかけ）

「さて、もし仮に、今言ったような条件であなた方が私を釈放するとしても、私

は皆さんにこう語ることでしょう。

「アテナイの皆さん、私はあなた方をこよなく愛し親しみを感じています。ですが、私はあなた方よりもむしろ神に従います。息のつづく限り、可能な限り、私は知を愛し求めることをやめませんし、あなた方のだれかに出会うたびに、勧告し指摘することをけっしてやめはしないでしょう。いつものように、こう言うのです。

『世にも優れた人よ。あなたは、知恵においても力においてももっとも偉大でもっとも評判の高いこのポリス・アテナイの人でありながら、恥ずかしくないのですか。金銭ができるだけ多くなるようにと配慮し、評判や名誉に配慮しながら、思慮や真理や、魂というものができるだけ善くなるようにと配慮せず、考慮もしないとは』と。

もしあなた方のだれかがこれに反論して、自分はきちんと配慮していると主張したら、私はその人をすぐに立ち去らせることなく、私も立ち去らずに彼を問い質^{ただ}して、吟味し論駁することでしょう。もしその人が徳を備えていないのに、もっていると主張しているように私に思われたら、もっとも価値あるものを少しも大切にせずにくだらないうものを大切にしていると、その人を非難することでしょう。このことを、若者でも年長者でも、私は出会った人^{おこな}に行^ようのです。他所の人にも街の人にも行いますが、私に生まれが近い分、この街の人々により一層そうするでしょう。」（29D-30A、納富訳、61-62頁）

＊「魂／肉体」「自分自身／自分に属するもの」の峻別：「私」とは何か？

日常では自身が何かに気づかずに、見かけや評判や地位や財産などが「私」だと思い込んで生きている。それは本当の「私」ではない。それを「魂」とすることで、「肉体」への欲望から切り離される：本当の価値（思慮、真実、正義）への眼差し

＊魂の浄化：『パイドン』では、哲学とは「死の訓練である」と語られる

＊魂の向け変え・挑発としての「哲学」：『ポリテイア（国家）』第7巻「洞窟の比喻」

哲学とは、本当の私を見出し、それを取り戻し浄化して、私自身へと変^{変わる}ること

ソクラテスの使命：魂の配慮を、神に代わって人々に促すこと（それゆえに憎まれる）

2、プリュタネイオンでの食事

（1）刑罰の提案

＊第1回投票での有罪確定後「刑罰」を提案する演説で「プリュタネイオンでの食事」

発言：ソクラテスが法廷で語った「大言壮語（高言）」の例

「さて、私はこういった人間なのですが、一体何を受けるのに値するのでしょうか。

なにか善きものでしょう、アテナイの皆さん。もし真に値するものに应じて刑罰を

申し出るべきならば。それも、私に相応しい、そんな善きものなのです。

では、貧乏にもかかわらず、あなた方に勧告するために暇を得る必要があるような、そんな貢献者には、何が相応しいのでしょうか。アテナイの皆さん、こんな男には、プリュタネイオンの会堂で食事に与る権利、それ以上に相応しいことはありません。あなた方のだれかが、馬や、2頭立てあるいは4頭立ての馬車で、オリュンピアの競技会で勝利を収めた時より、もっとずっと相応しいのです。その理由は、競技会の優勝者は皆さんを幸せであると思わせてくれますが、私は実際に幸せにするのであり、また、彼らは養ってもらう必要などないのに、私はそれを必要としているからです。ですから、もし正義にそくして私に値する刑罰を求めるべきなら、これを申し出ます。つまり、プリュタネイオンでの食事です。」（36D-37A、納富訳、86頁）

*プリュタネイオンの会堂（迎賓館）：外交使節や各種競技会優勝者など、ポリスの要人には無料で食事を供せられる権利。オリュンピア競技会は当時もっとも有名な国際的行事であり、そこでの優勝者はポリスの威信を高める功労者と見なされていた

（2）オリュンピア競技

*オリュンピア競技会：騎馬競技、戦車競技／長距離走、スタディオンの競走、五種競技、レスリング、ボクシング。自分の肉体を鍛え上げ、いわば自力で勝利を勝ち取る真の体育家である個人競技選手に対して、騎馬競技と戦車競技に参加できたのは、資産と地位に恵まれた一部の特権階層の人。騎馬や戦車の競技では馬や車の質が勝敗を決定的に左右し、優れた馬をそろえ、よい調教師や御者を賄える特権的な者が圧倒的に有利。戦車競技で優勝者としてオリーブの栄冠を受けたのは、実際に馬を操って危険なレースを制した御者ではなく、その馬や戦車の持ち主。王侯貴族が名誉をかけて参加し、彼らの統治・出身のポリスの威光を誇示する（ピンダロス「オリュンピア第2歌」、アクラガス王テロンの優勝など）

*クセノファネスのエレゲイア詩（断片2）との呼応

優勝するならば、つまりは足の速さで、

あるいは五種競技で——ゼウスの神域が

オリュンピアなるピサの川のほとりに建つ場で行なわれる競技祭でのこと一、レスリングや、

あるいは苦しい拳闘や、

パンクラティオンというあの恐るべき競技であれ、

勝てば、優勝者は町の人々の目には栄えある者として映る。

そして、競技会では晴れやかな貴賓席を与えられ、

食べ物もポリスの公費で供され、

贈物ももらい、自分の宝庫にできる。

馬で勝っても、これらのものがすべて手に入るのだ、
この私ほど値打ちがあるわけでもなくせに。というのは、
私のもつ知恵のほうが人間や馬の体力よりもすばらしいからである。
まったくもって、でたらめで間違った世の習わしだ、
すぐれた知恵よりも体力を尊ぶのは。
なぜなら、世に強い拳闘選手がいたところで、
五種競技やレスリングの猛者がいたところで、
足の速さで、つまり人間の体力の技のうちで
格別尊重される競技で、すぐれた者がいたところで、
その人のおかげでポリスの安寧秩序が増すわけでもなかろう。
ポリスにささやかな喜びをもたらすにすぎないのだ、
ピサの岸辺で行なわれる競技の勝利者なんか。
それでポリスの金庫が潤うわけではないのだから。

(西村賀子訳『エレゲイア詩集(西洋古典叢書)』京都大学学術出版会、2015年、288-289頁)

*前 416 年、当時将軍職にあったアルキビアデス(前 450 年頃-404 年)は、オリュンピアで個人参加者として前例のない 7 台の戦車をレースに出走させ、1 等、2 等、4 等の順位を独占。翌 415 年春の民会演説で、シリチア遠征軍の指揮官になるべくアピールする(トゥキディデス『戦史』第 6 巻 16)

*前 416 年夏、アルキビアデス献策のシチリア島遠征が実行される前年、彼の政治的人生の絶頂期。プラトン『饗宴(シュンポシオン)』で描かれる：前 416 年春に開催された悲劇コンクールで初めて優勝した詩人アガトンの祝勝宴会に、酔っぱらったアルキビアデスが乗り込んできてソクラテスを見付け、驚愕しながら彼との関係を赤裸々に語る*ソクラテスとアルキビアデスとの交際(ソクラテス文学の主題)：アテナイへの裏切りや翻弄(最終的には三十人政権の命で暗殺)はソクラテス裁判の遠因

*アテナイの同胞たちに「魂をより善くするよう配慮せよ」と日々対話で促し、そうして神の使者としてポリスに貢献してきたと自負するソクラテスと、オリュンピア競技会の勝者としてもてはやされたアルキビアデスら貴族たち、どちらが真正の功労者表面的な華やかさに目を奪われて、本質的な「善さ」を見失った偉大なポリス・アテナイの人々への痛烈な皮肉

オリュンピア競技会の優勝者は、国の誇りとなり国民を熱狂させて「幸せであると思わせてくれる」、つまり幸せな気分にしてくれる。だが、真正に「幸せである」とはどういうことか？ 哲学が問いかけ

(3) オリュンピア優勝者と哲学者の生き方の比較

*オリュンピア競技会の優勝者は、栄誉と「プリュタネイオンでの会食」など生涯にわたって与えられた有形無形の恩典によって、人々の羨望の的＝人生の「幸せ」典型例

*『ポリテイア（国家）』で、理想のポリスに指導者の人生を競技優勝者と比較：国の守護者たちは財産も家族も共有にするという提案の後、オリュンピア競技の勝者たちが送る、最も幸福だと羨ましがられる生活よりも、もっと幸福な生活を送ることになる（『ポリテイア（国家）』第5巻 465D-E）

*国そのものを守り保全することが、守護者たちが獲得する栄冠；より尊敬に値する「幸せ」な生き方（プラトン『法律』第5巻 729D-E）

*哲学的な生き方をオリュンピア競技会の優勝者と比較（魂のミュートス）：レスリング競技は、相手を3回投げ倒すと勝利が確定する。知の恋人たる哲学者はそのような生を3回選んで生き通すならば、他の魂とは別の待遇が得られる。自身が元そこにいた天上の神々の世界に早く帰ることができる。哲学者として生きた魂は、今1つ勝利を得たのであり、オリュンピア競技会でのレスリング選手と同様、3番勝負のうち1つを勝ち取ったことになる

魂の不死という視野で「3番勝負」において次の人生をにらんで生き方を選ぶべき。哲学者として生きる魂こそ、例外的な栄誉と特別なご褒美を得ることができる。哲学は運動選手というモデルをつうじて新たな生き方を提示する（『パイドロス』256B）

*プリュタネイオンの食事というオリュンピア競技会優勝者たちの栄誉を要求したソクラテスは、生き方をめぐる競争を提示

3、最後の言葉

(1) 判決後のコメント

*「息子たち」の吟味

「しかしながら、私は彼らに、これだけのことをお願いします。皆さん、私の息子たちが大人になったら、私があなた方を苦しめたその同じことで彼らを苦しめて、仕返しをしてください。もし彼らが、徳よりも前に金銭やその他のものに配慮を向けていると皆さんに思われたなら。またもし、なにも大層な人物ではないのに、そう自分で思っていたら、ちょうど私があなた方にしたように、彼らを非難して、配慮すべきことを配慮していない、まったく価値がないのに、なにか大層な人物だと思っている、と言って仕返しをして欲しいのです。そして、もしあなた方がこのことをして下されば、私自身も息子たちも、あなた方から正しい報いを受けたことになるでしょう。」（41E-42A、納富訳、105-106頁）

＊別れの言葉

「ですが、もう去る時です。私は死ぬべく、あなた方は生きるべく。私たちのどちらがより善き運命^{さだめ}に赴くのかは、だれにも明らかではありません。神は別にして。」
(42A、納富訳、106頁)

「しかし、もう終りにしよう、時刻だからね。もう行かなければならない。わたしはこれから死ぬために、諸君はこれから生きるために。しかしわれわれの行く手に待っているものは、どちらがよいのか、誰にもはっきり分らないのだ、神でなければ。」(田中美知太郎訳、新潮文庫、1968年、67頁)

＊冒頭の一文に対応

「アテナイの皆さん、皆さんが私の告発者たちによってどんな目にあわれたか、私は知りません。ですが、私のほうは、あの人たちのおかげであやうく自分自身を忘れるところでした。それほど説得力をもって、彼らは語ったのです。しかし真実は、あの人たちは、いわば何一つ語りませんでした。」(17A、納富訳、16頁)

(2) まとめ

＊ソクラテスが哲学を始めたとは、どういうことか？

「哲学」とは何か？ 人間本来の生き方

「人間」とは何か？「生きる」とは？

より善き生き方を目指す探求

ソクラテスに挑発された私たちは、どう生きていくのか？

「哲学者 φιλόσοφος」とは、知を愛し求めて生きる人間そのもの

【参考文献】

プラトン『ソクラテスの弁明』、納富信留訳、光文社古典新訳文庫、2012年

納富信留『哲学者の誕生 ソクラテスをめぐる人々』、ちくま新書、2005年

——『プラトン 哲学者とは何か』、NHK出版、2002年

——『プラトンとの哲学—対話篇をよむ—』、岩波新書、2015年

——「ソクラテスの不知—「無知の知」を退けて」、岩波書店『思想』948、2003年4月

プラトン『ソクラテスの弁明』、田中美知太郎訳、新潮文庫他、1959～1975年；三嶋輝夫訳、講談社学術文庫、1998年、他多数